

昔むかしのそのむかし。

ある朝、かにが川へ顔を洗いにいって、かきの種をひとつひろいました。かには、かきの種を家に持ってかえって、畑にまいて、毎朝毎朝、

「生えねばはさもう。生えねばはさもう」といいました。

ある朝、かにが畑に行ってみるとかきの種が芽を出していました。そこで、こんどは、

「大きいならねばはさもう。大きいならねばはさもう」といいました。すると、かきの木は大きくなりました。けれどもなかなか実がならないので、かには、

「ならねばはさもう。ならねばはさもう」といいました。するとかきの実がいっぱいになりました。そこで、こんどは、

「熟れねばはさもう。熟れねばはさもう」といいました。かきの実は真っ赤に熟れました。

ところが、かには木に登れません。かにが、下からかきの実を見上げていると、さるがやって来ました。そこで、

「さるどん、さるどん。あのかきの実をひとつ取ってくれないか」と、かにがたのむと、さるは、

「ああ、取ってやるぞ」といって、木に登っていきました。けれども自分ばかり、取っては食い、取っては食いして、かにはひとつもくれません。

「さるどん、さるどん。おれにもひとつ落しておくれ」と、かにがいうと、さるは、

「ああ、わすれていた。それ、ほい」といって、まだ青いかきの実を取って、かにめがけて投げつけました。かきの実はかににぶつかり、こうらが割れて、かには死んでしまいました。すると、こうらの中から、子がにが、ぐやぐや生まれてきました。

やがて、子がにたちは大きくなると、

「どうしておれたちには母さんがいないんだ」といいました。そして、さるにかきの実を投げつけられたことを聞くと、

「さるが母さんを殺したんなら、かたきを討たなくちやならない」といいました。そして、子がにたちみんなで、猿が島へかたき討ちに出かけました。

子がにたちが進んでいくと、くされなわが飛んできて、

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」とききました。かにが、

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」と答えると、くされなわは、

「それなら、おれも連れていってくれ」といって、ついてきました。

しばらく行くと、うすがごろごろ飛んできました。

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」

「それなら、おれも連れていってくれ」といって、うすもついてきました。しばらく行くと、牛のくそが飛んできました。

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」

「それなら、おれも連れていってくれ」といって、牛のくそもついてきました。

そこへはちが飛んできました。

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」

「それなら、おれも連れていってくれ」

するとこんどは、丹波ぐりが飛んできました。

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」

「それなら、おれも連れていってくれ」

こうして、くされなわと、うすと、牛のくそと、はちと、丹波ぐりがせいぞろいして、かには元気を出して進んでいきました。ガサガサ、ドウドウ、ジャクヤ、ジャクヤとみんな歩いていきました。

いよいよさるが島のさるの家に着きました。家の中をのぞいたら、うまいぐあいに、さるは向こうを向いて、いろりて背あぶりしていました。

そこで、かにがみんなにいました。

「丹波ぐりどん、おまえはいろりの中に入ってはじめてくれ。さるが熱い灰をかぶって飛んできたなら、わしらは水がめにかくれていて、はさみで切つてやる。はちどんはみそ桶の中にかくれていて、さるが飛んできたならさしてくれ。牛のくそどんは、戸口にすわって、さるがすべりこけるように待っていてくれ。くされなわどんは戸口の上でうすどんをつりさげて待っていてくれ。そして、さるがすべりこけたらつぶしてやれ」

みんなはそれぞれの持ち場に着きました。

しばらくすると、いきなり、丹波ぐりがはじめて、さるに熱い灰をぶっかけました。さるは飛びあがって水おけの所へ走っていきました。すると水おけからかにかいっばい出てきて、ぐっしやーんとさるに切りつけました。

「これはかなわん」さるは、みそ桶のところへ飛んでいきました。するとみそ桶からはちが飛んででて、さるをぐぎやぎやぎやーんとさしました。

「これはかなわん」さるは、家から飛びだしました。ところが、戸口のところで牛のくそをふんづけて、仰向けにすべりこけてしまいました。そこへ、くされなわが切れて、うすが落ちてきてさるの上に乗っかり、さるは死んでしまいました。

こうして、かには、親のかたきを討ったということです。

おしまい